

松下幸之助記念志財団 研究助成
研究報告

(MS Word)

【氏名】 具慧原

【所属】 (助成決定時) 東京大学人文社会系研究科

【研究題目】 日本および欧米における「日本」表象とその「結節点」としての小津映画

【研究の目的】 (400字程度)

本研究は小津安二郎(1903~1963)映画を論じる際に用いられる「日本的なもの」という概念が、1920年代後半から1980年代までの日本国内や西洋の言説においてどのように形成され、変容していったのか、その過程のダイナミズムを描き出すものである。小津は1970年代にアメリカの論者たちによって「最も日本的な監督」として世界に知られることとなったが、ここでの「日本的」とは外部からのオリエンタリズム的な視線から期待される「日本像」に合致するものであった。ところが小津は生前に日本国内ですでに「最も日本的」と評価されており、その評価は外から与えられた像と重なるところもあるとはいえ、戦前から戦後にわたる日本固有の事象と絡み合うことで当時の日本の文化状況・時代を反映する複雑な「日本像」を代理している。それゆえ小津をめぐる日本国内のローカルな言説を辿ってみることは、「日本的なもの」に対するグローバルな議論の位置づけを示しうるのみならず、「日本的映画」がどのように創出されていったかを反省的に考察することを可能にする。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

小津映画の「日本的なもの」については、それに対する小津没後の西洋の議論が広く知られているが、日本国内の批評言説は未だほとんど検討されていない。したがって本研究は、まず1920年代後半から60年代前半までの日本国内の言説を吟味し、従来の研究に欠けていた「日本的なもの」の意味内容の歴史の変遷および「日本像」の各時代における複数性を解明することに取り組んだ。これを通して、「優秀な西洋映画／低級な日本映画」「戦後の新しい映画の傾向／従来の保守的な傾向」「海外に受ける時代劇／外国人には理解できない現代劇」「戦後世代の若い監督／巨匠」といった時代ごとによって変わっていく日本映画をめぐる二項対立の下で、小津の「日本的なもの」の内包は伝統に依拠するのみならず、伝統の再解釈としての同時代や現代、過去をも包摂しうるものとして多様に捉えられており、かつそれを肯定的なものとしてみならず観点と否定的なものとしてみならず観点が常に共存していたことを明らかにした。

そのうえで、ローカルな文脈の議論を踏まえ、1970年代から1980年代まで行われたグローバルな「日本的なもの」の議論を捉え直した。これにより、1970年代のアメリカでの議論は小津の「日本的なもの」を禅芸術と結びつけ、全面的に肯定的なものとして転換しており、1970年代の文化論的解釈に反論する1980年代の日本とアメリカでの議論は小津を「日本的なもの」から解放し、小津研究の新たな地平を開いたことが示された。ところがそれと同時に、1970年代の議論と1980年代の議論は「日本的」という評価にある日本国内の歴史的文脈を捨象しているという点で、同じ前提の上に立っていた。1970年代のアメリカの論者たちは小津映画が実際に置かれていた文脈を考慮しないことで、「日本的なもの」を解釈する準拠枠として禅文化を取り上げた。また1970年代の議論に反論する1980年代の議論も小津に対する「日本的」という評価の歴史性を見逃すことで、1970年代の議論の前提を許容してしまっていた。

【結論・考察】 (400字程度)

本研究は、戦後「日本的監督」となったと通常認識されている小津が、実際には遅くとも1934年からすでに「日本的」と形容されていることを発見し、小津映画について論じられる「日本的なもの」という概念

は時代的変遷と絡み合うことで日本映画史の流れと呼応する、歴史性を帯びるものだったことを明らかにした。また日本国内では「日本的なもの」の意味内容が重層的に構築されており、その議論は日本の文化を世界の文化においていかに位置づけるか、というグローバルな射程を持っていたのに対し、小津の「日本的なもの」が実際にグローバルな文脈に置かれた際に、かえって意味の狭い閉ざされたものを焦点とするにいたったことを新たに指摘できた。小津映画研究の永遠なるテーマである「日本的なもの」の受容史を描き出した本研究は、小津映画、ひいては日本映画研究に有益な参照点となりうるだけでなく、時期的に重なっている日本国内における他分野の議論、たとえば「日本文化論」と通じるという点で日本思想史の研究に手がかりを提供できる。